

(1) 提案のコンセプト

①資産名称

「阿蘇－火山との共生とその文化的景観」

②文化資産の概要

日本列島は、火山が集中して分布する世界有数の火山地帯である。このうち、約 27 万年～ 9 万年前にかけて 4 回の大規模な噴火を重ねた複式火山・阿蘇。特にその最後の噴火では流れ出した火砕流が中部～北部九州を焼き尽くし、火山灰が遠く北海道まで堆積するほどの壮絶なものであった。その結果、東西約 18km、南北約 25km にわたる巨大な陥没カルデラが形成され、ひと目でそれが火山性の窪地と分かるものとしては世界最大級の規模となった。カルデラ内部では、中央火口丘群の活動が始まり、同時にカルデラ湖が形成されたが、その後、湖水は立野火口瀬から流出し現在に至っている。

中央火口丘群のうち、中岳（1,506m）は現在に至るまで活発な活動を続ける活火山である。直接火口が覗き込める希有な例でもあり、古くから畏敬の対象となり人々に崇め奉られてきた。阿蘇神社（重要文化財）の祭祀をはじめ、修験者らもこの山を信仰の対象とし、民衆は「お池さん参り」と称して火口に参詣した。しかし、阿蘇は、単に信仰の対象としてとらえられただけではなかった。人々は、たくみに寒冷で痩せた火山灰の大地に挑み、畏怖すべき自然と時に対峙し、かつ共存しながら、すでに有史以前から生活の足跡を記していった。阿蘇神社の主神である健甕龍命（タケツツミコト）は開拓神としての性格が強く、阿蘇開発にまつわる神話が多く伝承されていることや、「阿蘇の農耕祭事」（重要無形民俗文化財）が一連の米作りをモチーフにしていることもこれを物語っている。

阿蘇における人々と自然との関わりで特筆すべき点は、人々が活火山でなおかつ高冷地であるという過酷な自然環境を受け入れ、生活の中に活かしてきたことにある。その代表的な例として、人々が多くの牛馬と共に草原を維持してきたことがあげられる。阿蘇の草原は自然のままの生態系ではなく、人間が長年におたって野焼き・放牧・採草を続けてきたことにより維持された二次的な生態系である。『延喜式』にすでに「牧」の記述が見られることから、少なくとも平安時代には人為的な関わりがあったことが窺われる。また、これらの草地では、大陸系の植物を始め、多くの草原性動植物が絶滅せずに生き残り貴重な生き証人となっている。阿蘇に分布する植物は約 1,600 種で実に熊本県分布種の 70 %を占め、日本に分布する維管束植物の 5 分の 1 にも達する。また、こうした草原を背景に棲息する動物たちも数多く、鳥類、チョウ類など、独特な草原生態系の宝庫ともなっている。

現在阿蘇のカルデラの内部では、およそ 5 万人の人々の暮らしが営まれている。阿蘇は古来より自然と人との絶妙なバランスをもって共生している地域であり、火山地域という過酷な自然環境に対峙した人々のたくましさや知恵との記憶をとどめるといった意味において、顕著な普遍的な価値を有する文化的遺産である。また、人々の手により維持されてきた草原は、適切に保全しなければやがて消滅を免れないかけがえのない存在であり、我々が如何に自然と共生していくかという未来を考えるうえでも他とない遺産である。

③資産の概要を示す写真



外輪山と米塚



阿蘇五岳と
阿蘇谷

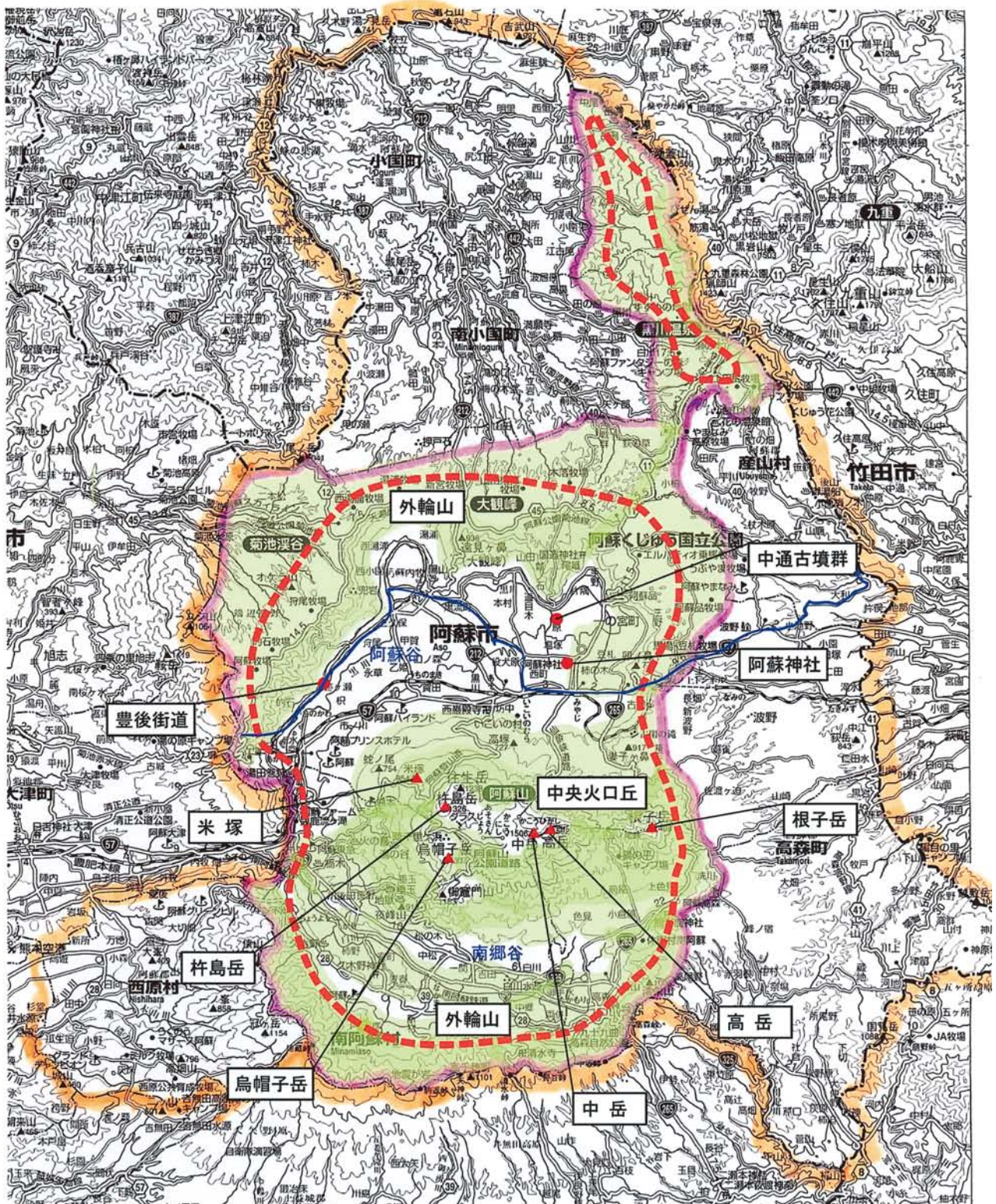


中岳火口



草地景観

④資産の位置図



- 丘陵の草地
- 文化的景観（外輪山周辺の草地、中央火口丘周辺の草地）
- 阿蘇地域（阿蘇市、南小国町、小国町、産山村、高森町、南阿蘇村、西原村）
- 阿蘇くじゅう国立公園
- 豊後街道

©塔文社提供